

書 評

創価大学三十年誌編纂学生委員会編

『創価大学三十年誌 [学生編]』

(創価大学学生自治会、2001年)

水 元 昇

「創価大学は学生が主役であり、創立者である」との言葉どおり、この三十年誌の発刊が学生たち自身の手によって成し遂げられた。自らの歴史を自らでとどめ、形として作り上げたこの功績は大きい。私も卒業生の一人としてこの書を開くと創価大学の歴史だけでなく、自分の歩んできた歴史がまるで走馬灯のように浮かんでくる。多くの先輩たちが、そして後輩たちが教職学一体で切り拓いてきた大学建設の歴史。その歴史の編纂を、2001年という重大な歴史の転換点のこの時を目指して、汗と涙で築き上げた尊い労作業にまず心から敬意を表したい。

混迷の大学紛争を超え、第三の大学さらに“世界平和のフォートレスたれ”との高邁な理想を持ち出発した創価大学の開学。女子教育の最高学府としての期待を一身に担って出発した創価女子短期大学。そして、新世紀の黎明を告げるべく世界市民の形成を使命として本年出発したアメリカ創価大学。この創価教育の最高学府としての草創期の30年を歴史として綴るこの書の発刊の意義は大きい。

まず冒頭には創立者が万感の思いで書かれた「創価大学第1回入学式」との「随筆 新・人間革命」が巻頭言として掲載されている。そこには創立者の学生への熱き思いが溢れ出ており、創価教育の原点がどこにあったかを読むものに真っ先に呼び起こしてくれる。

本書全体の構成としては7章からなり、一つ一つに創意工夫が見られ、30年の輝きをさまざまな観点から表現しようとの試みが見られる。以下、概観してみたい。

第1章ではこの30年の年度別のダイジェストとして大学の発展の歴史がコンパクトにわかりやすくまとめられている。大学の行事はもちろんだが、学生たちが主役になって取り組んださまざまな建設作業が一つ一つ意気軒高に語りかけてくるようだ。

続く第2章では、「建学の理念」として創立者の思想と行動、そして牧口先生に始まる創価教育の源流からの考察や海外での創立者の講演の一覧が、そして創立者と学生という点からまとめられている。この章では紙幅の関係もあるだろうが、膨大な資料をまとめるにはもう少し詳しい考察があってもいいのではと率直に感じた。だが、これはむしろ大学史としての五十年史の挑戦課題なのかの知れない。牧口先生・戸田先生を源流とする創立者の思想と行動が大学の理念となり、学生たちが創立者の精神を自らの精神と捉え、創立者とともに歩み、作り上げてきたものこそ「創価大学の歴史の核心」なのだと再確認できる。

第3章では「人間教育の作業場」というテーマで各学部・別科・通教・大学院、そして女子短大・研究所・図書館さらにアメリカ創価大学にいたる各教育・研究現場での沿革や概要がまとめられている。そこには創価大学がこの30年いかに多角的に発展を遂げてきたかという事実が一段と輝いている。そこであげられているコラムの中で、特に大学院生の手記には教員が学生に陰に日向に真摯に関わることが学生の成長に欠かせないということを痛感させる。また、最後に二〇〇一年教育ビジョンを掲載して、今後の創価大学の未来構想を彷彿とさせていることも見逃せない。

続いて第4章では、「知のグローバルネットワーク 海外交流」と題して、大学交流の歴史、そしてその架け橋を渡り、築いてきた学生たちの交流の歴史がまとめられている。2001年4月現在での77校の交流協定の一覧には、その発展の姿に草創からの一員としても感慨深いものがある。

また、学生たちが国際センターや各種クラブ活動を通じて世界へのネットワークを広げようと努力してきた足跡が記されている。多くの留学生が創価大学を訪れ、創大生と交流を深め築いてきた絆は、これからも世界へのネットワークとして拡がっていくことだろう。そして、ここに述べられているように創立者への海外からの多くの顕彰とそれを後に続く学生の交流へとつなげていった歴史が、これからの創価大学のまさに「知の淵源」となっていくことを期待してやまない。

さらに第5章では創価大学の特色の一つでもある「学生参加」の挑戦について触れられている。学生自治会の歴史、そして学生自らが主体者との自覚で取り組んできた各種テーマが取り上げられている。特に「学費問題」を学生参加の立場から捉えてきたことは創価大学の画期的な歴史の1コマであり、その根底に流れる精神こそ「自らの大学を自らの責任で作り上げる」との創立者としての自覚であった。また、その一端として知的啓発運動としての自主講座・新聞・論集の発刊などがあげられている。そして創立者が折りあるごとに学生たちに語られてきた指導・講演をこれまで本として学生自身の手でまとめ出版して

きたが、このタイトルも「21世紀の潮流」から「創立者の語らい」へと進化を遂げて、何よりも驚くことは、この30周年記念に発刊されたものがなんと上中下三巻で計1500ページをゆうに越える分量になっているということである。ここにも創立者の熱き思いが感じられる。また、学生寮の歴史や学生行事、とくに創大祭の歴史も学生の視点からまとめられている。

第6章では、「全体人間へのプレリュード—クラブ活動」と題し、代表的なクラブの歴史がコンパクトにまとまっている。クラブハウス探訪として12のクラブが紹介され、その合間に「外国語弁論大会」「創価芸術展」「神宮出場」が代表的なエポックとして刻まれている。クラブ団体一覧ではこの30年間に登場したさまざまな団体の名前とその創部の年ができる限り調べ抜かれている。今後、紙幅の関係もあろうがこれをベースにして更なる歴史をとどめることができることを期待したい。

そして、第7章を飾るのが「〈大学〉の見える場所 39人が語る創価大学の30年」という創価大学とともに歩んできたメンバーの代表がそれぞれのテーマで歴史を証言している最終章である。大学の教員・職員の代表や各種分野で活躍するメンバーが自分の言葉で自分の視点で歴史を記している。一つ一つが黄金の思い出である。

また、巻末に年譜・各種資料が克明にまとめられていることも大変な作業であったに違いない。

この編纂作業は1997年にスタートし3年以上をかけて大学院生・学生の有志が中心となって纏め上げたという。皆様の努力に心から敬意を表したい。

— 創価大学の歴史は自分自身の歴史でもある。— 私自身を含めそう語れる卒業生がこの30年でいまや全世界に数万名を越えることになった。この書の背後に多くの卒業生の心からの喜びの笑顔が見え隠れするのは私だけの感想ではないだろう。